

体験活動を通して日本とミャンマーのつながりを学び、 国際交流によってお互いを尊重する心をはぐくむ現地理解教育

前在ミャンマー日本国大使館附属ヤンゴン日本人学校教諭
福岡県北九州市立西小倉小学校教諭 成澤 千晶

キーワード：ミャンマーの現地理解、ミャンマーで働く日本人、お互いを尊重して伝えあう力

1. はじめに

ヤンゴンは年々発展がめざましいが、衛生上の問題や道路交通の問題、治安の問題等、様々な問題が多く、発展途上国という印象もまだまだ強い。学校の外や家庭の外の状況、ミャンマーの文化についてあまり理解がないままに、周囲に対して一方的な考えを持つ様子が多く見受けられた。そういった状況から、ヤンゴン日本人学校の子供たちが現地の生活に触れる機会が必要だということは赴任当初から強く感じていた。そこで、校内の環境だけではなく、自分たちの今住んでいるヤンゴンという地域についての理解を深めさせたいと考えようになった。ここでは、赴任期間3年間の中でそういった思いを持ちながら行った実践について年度ごとに報告することとする。

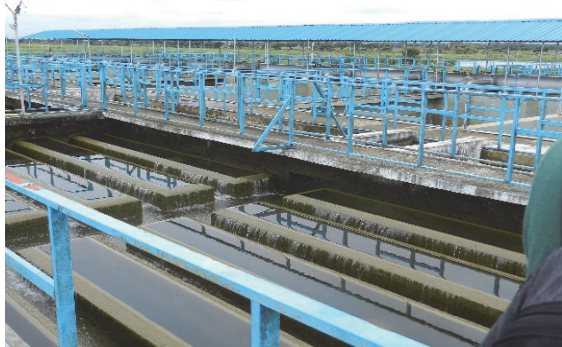
2. 実践内容

(1) 2017年度（小学部4年生）

① ヤンゴン浄水場見学（ヤンゴンの姉妹都市である福岡市の水道局が協力している浄水場）

社会科「水と私たち暮らし」に関連してヤンゴン市内のニャウニャピン浄水場を見学した（写真1）。浄水場はヤンゴン市内には当時1か所しかなかった。浄水場までの道のりは、交通事情によってバスで1~2時間ほどかかる。浄水場建設は、JICA（国際協力機構）が関わっており、設備は日本の浄水場とほとんど変わらない。現在も10名ほどのJICA専門官がミャンマーにいて、水質管理方法や今後新しく建設される浄水場についての指導を行っているとのことである。なぜ日本のシステムがミャンマーで採用されているかという点、今後日本企業がミャンマーに進出する先駆けとして、国の技術売り込みたいという考えがあったからだとのことである。

今回、児童達の学習を進めるにあたって、福岡市から派遣されているJICA専門官へ協力を仰いだ。ミャンマーでは、日本と同じようには水道水を飲むことができないが、洗濯や入浴、トイレなど、生活のいたるところで欠かすことのできない水がどのように届けられているのかを学ぶ良い機会となった。また、日本から離れたミャンマーの地で、日本の技術を感じることができる学習となった。



【写真1】濾過池は日本と変わらないレベル

② ヤンゴン市内の消防署見学

社会科見学として、ミャンマーの消防署を見学した（写真2）。消防車が教科書で学習した日本で使われているものとほとんど変わらないことに児童たちは驚いていた。その理由は、消防車両の多くは日本消防協会、日本外交協会から寄贈された中古消防車両という状況だからである。その中には製造から40年以上が経過した車両もあるが、大切にメンテナンスされ、第一線で活躍している。消防局は本部をヤンゴン市に置いている。2005年に首都がヤンゴンから内陸のネーピードーに遷都され、ほとんどの政府機関の本部がネーピードーに移転したが、消防局はミャンマー最大の都市であるヤンゴンの消防体制を維持するためにヤンゴンにとどまることになったとのことである。この本部に加えて、首都であるネーピードーに消防本部が、各管区及び州、県、市ごとに消防署が置かれている。



【写真2】ミャンマーの消防署

ヤンゴン日本人学校では年に4回ほど避難訓練を実施しているが、今回の消防署見学は、学校の外での火災等への対策について理解を深めるなど、児童達の危機管理意識を高めるのにも効果があった。また、消防職員が日本で研修しているなど、児童達が生活の中でなかなか気づきにくい日本とのつながりを感じることもできるよい見学となった。

③ メアリーチャップマン校との交流（日本人学校の近隣にあるろう学校）

メアリーチャップマン校は、ヤンゴン日本人学校の近隣にある、ミャンマーの聴覚障害者の方々が通う学校である。この実践の中心的な活動は、メアリーチャップマン校の方々との交流活動である。聴覚障害者の方への理解を深めるとともに、誰もが安心して暮らすことができる「共生社会」の大切さに気付き、自分ができることは何かを考え、実践しようとするのをねらったものである。自分なりの感じ方や考え方を深め、まとめたり発信したりする活動を行うことによって、改めて地域を見つめ直し、誰もがよりよく関わり合うことへの努力や工夫、思いなどを知ることにつながると考えた。また、自らの国籍などに関係なく、地域の一員としての自覚をもち、地域社会に関わる態度を育成したいと考えて単元を構成した。

（2）2018年度（小学部6年生）

派遣2年目は小学部6年生を担当し、ヤンゴン市内にて宿泊体験学習を行った。訪問した施設は、日本の縫製会社や JICA の施設、地元の小学校、地元の陶器工房などである。縫製会社では運営に携わっている日本人の方に、製品を消費者の手元に届けるまでの様々な困難ややりがいなどについて聞き、児童たちはその言葉に熱心に耳を傾けていた。また、ヤンキン教員養成附属小学校と交流活動を行い、ミャンマーに対する理解を深め、お互いを尊重し、共存・共栄しようとする態度を養った。ヤンゴン日本人学校に通う子ども達は、同世代の子ども達と関わる機会がほとんどないため、とても貴重な機会であり、新鮮な気分になったようであった。現地の子供達と共に遊びを教え合ったりミャンマーの生活習慣などに触れたりすることにより、海外で生活していることをあらためて実感し、自分たちの身の回りで人々がどのように生活しているのか、交流することでより深く理解した様子だった。各種の施設を見学することにより、ミャンマーの国について深く考えるきっかけとなり、さらに日本国とミャンマーとの互惠関係にも気づかせることができた。ヤンキン教員養成附属小学校では、現地の子供達と遊



【写真3】ヤンキン教員養成附属小学校で
現地の子供達に折り紙を教える様子

びの教え合いなどをして交流した（写真3）。また、JICA によるミャンマーの学校の教科書作りにおける研究や実践も行われているとのことで、児童達は両国が今後どのように関わっていくことになるのか思いをはせる場面もあり、とてもよい宿泊体験学習となった。

（3）2019 年度（小学部 6 年生）

派遣3年目は小学部6年生を担当し、総合的な学習の時間において、年度を通じて諫早市立小長井小学校（長崎県）の児童と年度を通じての交流（「世界の課題について考えよう」というテーマでヤンゴンについて考える）学習活動を行った。

●ねらい

ヤンゴン日本人学校と日本の学校が交流することにより、互いに住んでいる国、地域の特色や課題についての理解を深める。また、日本とミャンマーの互恵

回	第1回	第2回	第3回
時期	1学期中	2学期前半	2学期後半～3学期
ヤンゴン日本人学校	・自作のパンフレットでヤンゴン（ミャンマー）を紹介する。（電子データ送付による交流）	・ミャンマーの課題と解決案について紹介、提案する。（ビデオレターによる交流）	・宿泊体験学習の学習発表をする。 ・今までの感想を交流する。（Skype による直接交流）
小長井小学校	・ヤンゴンを紹介するパンフレットを読んだ感想を書く。	・課題に対しての解決策を一緒に考える。	・今までの感想を交流する。

関係に気付かせ、今後の両国にとってよりよい方向性を考える活動を通して、世界の国々に目を向け、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる豊かな国際性を育む。

●交流活動・内容

まず、「世界の課題について考えよう」というテーマで交流を進めることを児童達を中心となって決めた。教師は最初に「ミャンマーの良さを伝えよう」というテーマはどうかと提案してみたところ、児童達から「ミャンマーで生活していると、良いところだけじゃなくて悪いと思うところも感じるから、それについて聞いてみたい」という意見が複数出された。それにより、1年間の大まかな交流の流れを児童達に示した。第1回の交流に向けては、自分たちの住むミャンマーという国とヤンゴンという都市について知ってもらうため、調べ学習をしながらパンフレット活動を行った。ヤンゴンには人口が集中しているため、人口が日本と同じくらいだと思っていた児童もおり、調べる中での発見も多かったようだった。パンフレットの完成後、日本へ画像データを送り、日本の小学校の児童達からの感想をもらうことで、ミャンマーに来たことのない日本人の子ども達が感じるミャンマーのイメージについて、自分たちとちがう部分もあることに気付くきっかけとなった。

次に、第2回の交流へ向けて、児童達にミャンマーやヤンゴンの課題について挙げさせ、調べ学習やグループ活動での意見交換を行った。意見交換を行うことで、交流の際の発表の練習になり、表現の工夫や自分たちの考えを深める良い機会となった。特に興味深かったのは、意見交換を行う中で、そもそも課題として挙げた事柄は、本当に課題といえるのか、という意見が出てきたことだった。例えば、挙げられた課題の中には、「ミャンマーでは野犬を野放しにして、えさまで与える人が多いから、狂犬病が多いので良くない」という趣旨のものがあ、解決策として野犬を駆除するなどの意見が挙げられた。それに対して、ある児童は、ミャンマーでは生き物を大切にするという仏教の教えを大切にしているところがあるから、それを否定するような言い方は仏教を否定することにつながる可能性があることを指摘した。実際、犬のみではなく、ハトやカラス、猫などにも人がえさを与える様子は街中でごく普通に見かける光景であり、タクシーの車内では、蚊ですらも殺さずに手で車外へ逃がすようにするドライバーは非常に多い。児童の指摘を受けて、他の児童達は課題を吟味することとなり、「狂犬病が多いこと」を課題とすることになった。また、ヤンゴン日本人学校には事務業や校内環境整備業などを行うミ

ヤンマー人のスクールスタッフが働いているため、その方々に協力してもらった。児童達が課題と解決策を提案し、それに対してどう感じるかスクールスタッフに答えてもらうことが、児童達があらためて自分達の考えを見つめ直す良い機会となり、ミャンマー現地から発信する意見の質を上げることができた。このように、他の課題についても議論は深められていき、自分の考えや相手の考えをいったん受け止めて落ち着いて考える雰囲気が生まれた。それにより、第2回目の交流では、ミャンマーの抱える課題とその解決策について、単純なものや極端な考えのものが少ない状態で行うことができた。その上で、日本の小学校から返ってきた意見や感想の中には、現地で生活しているとなかなか思いつかないものもあり、児童達にとって有意義な意見交換となった。なお、第2回目の交流を終えてから、後述する宿泊体験学習を行ったため、児童達はこれまで調べたり意見交換したりした内容と体験学習によって見聞きした事柄を関連づけながら学習に臨んでいた。バスでの移動中などでも、ミャンマーの道路交通事情について考えながら道路を見ている児童もいた。

最後に、第3回目の交流に向けて、宿泊体験学習も含めてこの1年間で学習した内容や、それを踏まえて感じたことについてまとめ、Skypeを利用して日本の小学校とリアルタイムで交流を行った(写真4)。第2回目の交流で日本の小学校から送られてきた返事に対するお礼を伝えたり、それを踏まえて学級全体で出した課題に対する解決案を伝えたり、この1年間の感想を伝えあったりした。日本の小学校の児童達からは、今回の学習で、自分達も自分の住む町のことやほかのことでも前向きに課題と解決策を考えてみたいという言葉があり、お互い和やかな雰囲気だった。直接言葉を交わすのはこの時が初めてだったため、少し照れている様子も両側の児童達に感じられたが、テーマを持ってこれまで交流してきたこともあり、同じ事柄について共に考えてきた結束感のようなものも感じ取れ、とても有意義な交流とすることができた。交流活動終了後、ヤンゴン日本人学校の児童達からは、「相手がどんな気持ちでいるのか」、「相手も自分も大事にできているような、うれしい解決策は何なのか」という考え方ができるようになった気がして、人と話をするのに自信が持てるようになったという趣旨の言葉があった。



【写真4】日本の小学校とSkypeで交流する様子

3. 成果と課題

●成果

日本にある学校の児童との交流という目的意識を明確に持たせた上で、ヤンゴンでの生活やそこで働く日本人の活躍について学ばせたことで、児童が主体的に、そして意欲的に学習活動に取り組んだ。それにより、日本人として一方的な視点で物事をとらえるのではなく、他者を尊重して寄り添うような視点や国際性を持たせることができた。また、今回は協力いただいた日本の小学校側の教員がヤンゴン日本人学校での勤務経験があり、事情をよく理解していたことも成功につながった理由と思われる。

●課題

交流活動の計画はヤンゴン日本人学校から日本の小学校へ提案したものであり、相手方へ大きな負担をかけないために、ミャンマーの課題と解決案についてヤンゴン日本人学校側から提案して交流する形を取った。事前の準備に相応の時間がかかると予想されるが、日本の小学校側も同様に地域の課題と解決案について提案して相互に考え合う形を取る方法もあると思われる。